

鍋島と金襷手—繰り返しの美—展

Nabeshima and Kinrande: Recurring Designs Across Space and Time



鍋島と金襷手

—繰り返しの美—展 Nabeshima and Kinrande: Recurring Designs Across Space and Time

会期 2024年4月17日(水)~6月30日(日)

10:00~17:00 (入館受付は16:30まで)

*金曜・土曜は19:00~20:00 (入館受付は19:30まで)

月曜・火曜休館 *4月29日(月・祝)・5月6日(月・振休)は開館。

入館料 一般1,200円/高大生500円 *中学生以下は入館料無料。

交通 渋谷駅ハチ公口より徒歩15分・地下鉄A2出口より徒歩12分

京王井の頭線 神泉駅北口より徒歩10分

*当館に駐車場はございません。近隣のコインパーキングをご利用ください。

注意 ご来館の前に必ず当館ホームページにて最新情報をご確認ください。



整然と器面に続いている文様。器種や時を越えて何度も出現する図様。江戸時代に佐賀で作られた鍋島焼や金襷手様式の伊万里焼のデザインの中には、「繰り返し」の手法が見られます。

鍋島焼は、佐賀鍋島藩から徳川將軍への献上を目的に創出されたやきもの。佐賀・伊万里の大川内山の藩窯にて製作されたもので、17世紀末期には様式が確立されました。洗練されたデザインが数多見られ、唐花文や更紗文、桃文などを繰り返して連続させた構図もそのひとつ。同じ図様が時代を越え、踏み返されることも珍しくありません。

一方の伊万里焼の金襷手も、17世紀末期に成立した様式。佐賀・有田の民窯で焼造され、国内外で人気を博しました。様々な文様を組み合わせた緻密な構成が特色であり、皿と猪口などと器種をまたいであらわされる、定番の唐草文や幾何学文が見られます。また、色違いで表現される図様は、染付で骨格を描き上絵で彩色する、染錦ならではの楽しさがあると言えるでしょう。

藩の献上および贈答品であった鍋島焼と、国内外で需要された伊万里焼という性格の違いはありますが、同時代に成立した両様式の中には、「繰り返し」という共通したデザインの方向性が認められます。約80点が織りなす、「繰り返し」の美をご堪能ください。

なお、今展は展示室内照明のLED化後、最初の展覧会です。明るくなった展示空間で、金彩の輝きや繊細な筆致などをお楽しみください。

展覧会情報

- ◇ 名称：鍋島と金襷手—繰り返しの美—展
- ◇ 会期：2024年4月17日(水)~6月30日(日)
- ◇ 開館時間：10:00~17:00 (入館受付は16:30まで)
※金曜・土曜は10:00~20:00 (入館受付は19:30まで)
- ◇ 休館日：月曜・火曜
※4月29日(月・祝)・5月6日(月・振休)は開館。
- ◇ 入館料：一般1,200円/高大生500円
※中学生以下は入館料無料。
- ◇ 会場：戸栗美術館(東京都渋谷区松濤1-11-3)
- ◇ 交通：渋谷駅ハチ公口より徒歩15分・地下鉄A2出口より徒歩12分
京王井の頭線 神泉駅北口より徒歩10分
※当館には駐車場はございません。近隣のコインパーキングをご利用ください。

- ◇ 第1章「館蔵優品選—鍋島と金襷手—」(特別展示室)、第2章「鍋島焼」(第1展示室)、第3章「金襷手様式の伊万里焼」(第2展示室)の3章で主に構成いたします。
- ◇ 第1章では館蔵の鍋島・金襷手の優品を一堂に集め、第2・3章ではふたつのやきものに見られる「繰り返し」の美を、「連續文様」「定番文様」「色違い」「踏返し」の4つのアプローチでそれぞれ紐解いていきます。
- ◇ 初出展の「色絵 葡萄栗鼠文 角瓶」(画像①)を含む約80点を展覧いたします。



▲①色絵 葡萄栗鼠文 角瓶

伊万里

江戸時代(17世紀末～18世紀初)

通高 20.1cm

◆ 第1章「館蔵優品選—鍋島と金襷手—」(特別展示室)



▲②色絵 寿字宝尽文 八角皿

鍋島

江戸時代(17世紀末～18世紀初)
口径 20.8×19.4cm



▲③色絵 寿字吉祥文 鉢

伊万里

江戸時代(17世紀末～18世紀初)
口径 22.1cm

鍋島焼と金襷手様式の伊万里焼は同じ時代に様式が成立しながらも、それぞれ性格が異なります。藩窯で製作される鍋島焼は厳肅に、金襷手様式の伊万里焼は絢爛に、個性際立つ2つのやきものを、厳選した館蔵の優品10点から紹介いたします。

◆ 第2章「鍋島焼」(第1展示室)

鍋島焼 × 連續文様

染付による七宝と、上絵で彩色した菊花を組み合わせて描いた更紗文の皿。鍋島焼には連續した文様を丸い窓から覗くように切り取ったデザインがよく採用されており、とくに前期には様々な更紗文の皿類が見られます。



▲④色絵 更紗文 皿

鍋島

江戸時代
(17世紀後半)
口径 15.9cm

鍋島焼 × 踏返し

相対する2羽の鳳凰をあらわした皿。鳳凰の顔や体の向き、渦巻く尾羽などよく似たデザインですが、左は鍋島焼の中でも前期、右は盛期の作例です。鍋島焼では、同様の図様を時代を越えて繰り返し採用していました。



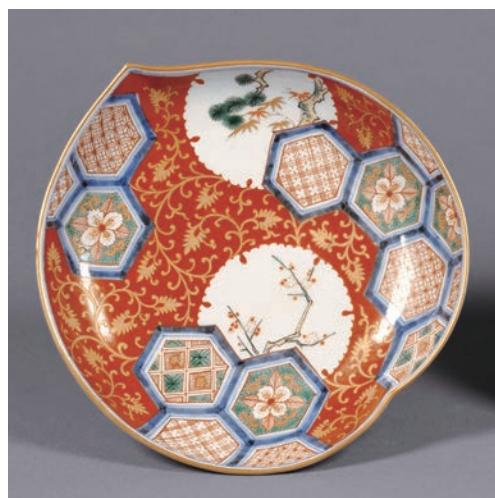
▲⑤色絵 鳳凰文 皿
いろえ ほうおうもん さら

鍋島 江戸時代 (左:17世紀後半/右:17世紀末~18世紀初)
口径 20.1cm

◆ 第3章 「金襷手様式の伊万里焼」(第2展示室)

金襷手 × 定番文様

左の桃形皿は、地文様として赤地に金色の唐草文を描いています。同じ唐草文は右の猪口にも。金襷手様式の伊万里焼には、別のうつわ、あるいは皿と猪口のように器種をもまたいで描かれる定番の文様が種々存在しています。



◀▲⑥色絵 雪輪亀甲文 桃形皿
いろえ ゆき わ きっこうもん ももがたざら

伊万里
江戸時代 (18世紀前半)
口径 21.2×20.2cm



▲色絵 山水文 猪口
いろえ さんすいもん ちょく

伊万里
江戸時代 (18世紀)
高 7.0cm



▲⑦色絵 瑞獸文 鉢
いろえ ずいじゅうもん はち

伊万里
江戸時代 (17世紀末~18世紀初)
高 6.8cm

金襷手 × 色違い

全く異なる彩色の一対の鉢。しかし、実は染付 (青色の部分) は同じデザインです。上絵付けの段階で、地を左は赤、右は萌黄に金色の唐草文と塗り分けています。染付で輪郭線などを引いて骨格を作り、上絵付けで色違いに仕上げる手法は、染錦ならではの楽しさです。

展覧会紹介文

- ◇ 幾何学文や唐草文など繰り返し表現された意匠に注目。(25字)
- ◇ 江戸時代の鍋島焼や金襷手様式の伊万里焼の中でも、幾何学文や唐草文など整然と器面に続いている文様や、器種や時を越えて何度も出現する図様に注目。約80点の出品で、繰り返しあらわされたデザインを紹介する。(100字)

会期中の催し物

- ◇ 展示解説『鍋島と金襷手—繰り返しの美—展』の見どころ
2階展示室にて、主な出展作品の見どころを紹介いたします。
 - 5月18日(土)・6月15日(土) 各日14:00～(約45分) □参加費無料(要入館券) □予約不要
- ◇ ラウンジ&ギャラリートーク「繰り返すデザイン—鍋島焼と金襷手様式の伊万里焼を紐解く4つのアプローチ—」
前半は1階ラウンジにて鍋島焼と金襷手様式の伊万里焼に見られる4つの「繰り返し」の手法について概説し、後半は2階展示室にて展示解説を行います。
 - 5月27日(月) 14:00～(約120分) □要事前予約 □先着30名様
 - 参加費 一般1,500円(税込)(入館券を別途お求めください)／年間パスポート会員1,200円(税込)
※当日はご予約の方のみご入館いただけます。 ※13時30分開館、17時00分閉館です。
- ◇ アート&イート 戸栗美術館×シェ松尾・松濤レストラン
戸栗美術館にて所蔵品をご鑑賞いただいた後、シェ松尾・松濤レストランにて佐賀県産の食材を使ったフレンチをご堪能いただけます。
 - 5月1日(水)～3日(金・祝)
各日各回10:30／11:00／11:30開始
 - 参加費20,000円(税込) □要事前予約 □各日各回先着6名様

同時開催

- ◇ 『江戸時代の伊万里焼—誕生からの変遷—』(第3展示室)
- ◇ 『鍋島焼・伊万里焼ができるまで』(やきもの展示室)

休館情報

- ◇ 2024年3月22日(金)から4月16日(火)まで、展示室内照明のLED化および展示替えのため、休館いたします。

次回展予告



染付 嵌唐草文 八角蓋物
伊万里
江戸時代(19世紀)
通高 13.2cm

古伊万里から見る江戸の食展

2024年7月11日(木)～9月29日(日)

江戸時代の食文化を通じて、実用品としての伊万里焼の魅力を探ります。

お問い合わせ

公益財団法人 戸栗美術館 広報担当 宛

〒150-0046 東京都渋谷区松濤1-11-3

TEL: 03-3465-0070 FAX: 03-3467-9813 E-mail: kouhou@toguri-museum.or.jp

公式サイト: <http://www.toguri-museum.or.jp/>